

「会員短信 40」

「新しみをさがして」 竹下和宏

米寿近くになっても、持ち前の性格で何か新しいことはないものかと探している。句会に出て、研鑽、琢磨をしてはいても、何とも面白かったなあと思って帰れることは少ない。俳句歴が長くなっても、成熟して新鮮な句がつかれるわけではない。

そこで、こんなことを思いついた。一句を何人かで作り上げるという趣向である。「上五と中七」を一人がつくり、それに別の人が「下五」をつけるのである。試みに『上の五七』と名付けて二、三百つくってみた。そして、身近な俳友に、季語無しの「五七」を提示して「下五」の季語をつけてもらった。

◆親子とて別の細胞

翺雲（節子） 菊根分（密子） 春嵐（うらら）

◆女将にも昼夜の顔

春の風邪（富美） 返り花（節子）

◆画伯にも傑作駄作

天高し（富美） 春落葉（節子） 山笑ふ（密子）

◆昼酒も生きてみてこそ

三鬼の忌（密子） 紫木蓮（富美）

◆休むとは木の側に人

轉れり（富美） 長閑なり（密子）

◆笑はさうてふ芸難し

万愚節（密子） 種ふくべ（富美）

これには、『下の七五』をつくって、「上五」を付けてもらう方法もある。頭の柔軟体操に利用していただけたら嬉しい。

寒梅や真似の嫌いは父譲り 和宏